

SPORTS

南日本こども新聞

新型コロナウイルスの影響で学校が休校になると並行して、部活動やスポーツクラブでも活動を縮小しています。試合形式の練習停止や大会中止などで当面の目標がなくなり、思い悩ん

**新型
コロナ**
一緒に考えよう

でいる人も多いと思います。今回は、スポーツ系の部活動やクラブ活動をしているオセモコ特派員に、自主練習の内容やモチベーション維持のために工夫していることを報告してもらいました。

スポーツ練習 どう工夫？

昇段試験に狙い定めて

藤崎 伊吹さん
(西伊敷小6年・鹿児島市)

柔道をしています。母が福祉施設に勤務しているため、柔道場での練習は自粛しています。

自宅では、足に重りを付けて階段の上り下りをしてほかに、腹筋ローラーを使ったりトランポリンをしたりして筋トレ、体幹トレーニングを頑張っています。

絶対に出場したいと思っていた大会が中止となり残念です。今は中学生になれば受けられる昇段試験に合格することを目指しています。試験を受ける予定の2年後には、医療が進歩してコロナウイルスが終息していると信じています。



足に重りを付けて階段を上り下りする藤崎伊吹さん

天声人語

広島市中区にある超寛寺住職の和田隆恩さん(53)には日課がある。標語を練り、カレンダーの裏紙に毛筆を走らせ、門前に掲げる。これまでは週1回だったが、コロナ禍でどがった空気を和らげたいと1日1枚に改めた▼「子ども怒鳴るな来た道じゃ お年寄りいたわれ来る道じゃ 感染者責めるな同じ道じゃ」。感染者を犯罪者のごとく責める風潮に不安を覚えた。前半は永六輔さんの本で学んだ人生訓に手を加え、後半は自ら韻を踏んだ▼「当たり前だったことが有難いことだったと気づかされる」。子どもたちが教室で学ぶこと。大人たちが職場で働けること。失って初めて知る日常の輝きを言葉につむいだ▼元証券マン。パブル崩壊のさなか、職場の雰囲気はさみ、重いノルマに疲れ果てた。仏門をたたいたのは30歳のときだ。「毎日の標語は、門前を行き来する皆さんに宛てたものですが、実は悩み続けた会社員時代の自分宛てでもあります」。SNSでも連日、発信を続ける▼連休がようやく明けた。学校や商店が再開した地域もあるが、なお警戒を解けぬ方も多いだろう。へしたいことはあきらめず。すべきことはあせらずに。できることはくらくらへすに。状況が好転せず塞ぎ込む日には、こんな一言を声に出して読んでみてい▼不安という名のウイルスが不満や不信を世界中に引き起こした春である。せめて日に一度は珠玉の言葉で自分の心をあためようと思う。感謝の日差しで花が咲く。不満の風で花が散る